



## 大分県書道

令和8年2月号 No. 428

### 郷土の偉人 松本 洪先生のこと

理事 池田英徳

(大方)

書道を学んできて、郷土の先達、豊後高田市呉崎出身の藤原楚水先生を知りました。一八八〇（明治一三）年生まれで一九九〇年ご逝去、一〇九歳、男性として日本一の御長寿でも有名でした。『明解墨場必携』『翰墨自在』『墨場必携歴代絶句選』等の著書に多くのことを教えてもらいました。

昨年一〇月、宇佐市四日市町出身の松本洪先生のことを本誌連載中の財前謙先生に教えていただきました。宇佐市でも松本姓はたくさんいますが、全く知らず想像すらできませんでした。

便利な時代、検索すると『漢文を讀む人のために』松本洪著、明徳出版社を購入することができました。この本を編纂したのは東京学藝大学書道科の初代主任教授・田辺萬平（古邨）先生。大分にも縁のある小坂奇石先生の僕社を継いだ江口大象先生の先生です。田辺先生は松本先

生の思い出の第一に「松本先生には東都空襲の夜、蠟燭の火を吹き消して暗黒の中で教えを受けたことがいくたびかあるので、心に痛みをおぼえるほどの追懐の情がある」と記されています。この時代の先生方の学びに向かう姿勢が、戦後日本を先進国に押し上げたのだと痛感します。

松本洪先生の「懐旧談」には以下の通り生い立ち、職歴が記されています。

一八七六（明治九）年、大分県宇佐郡の海岸に生まれた。（下庄村から天津村、町村合併で四日市村）、明治二十七年、上京、大同学館に入る。三十年、大阪の藤沢南岳先生の泊園書院に入る。三二年、中国武昌に遊学。三五年、早稲田中学教諭。大正九年、大東文化学院（現大東文化大学）を創設。昭和四年、国士館専門学校（現国士館大学）教授、その後、早稲田大学高等師範部教授となり七十歳で定年退職。昭和二六

年、東京学藝大学講師。その後も自宅であるもの拒まず漢文を教授。

田辺萬平先生は「松本先生は名譽に対しては全く無関心であられた。漢学者ではあったが生活気分は老荘的であった。学者、易者、僧侶など一度先生の門をくぐったもののみならず先生の門人になってしまふところを見ると、先生の学問の深さは底知れぬものがあると思はれる。」と述懐している。

松本洪先生と藤原楚水先生は四つ違い。同じく漢詩漢文を通じて交流があったのではと思うがわからない。財前謙先生に、大分県書道で毎月、大分県内にあるのに知らない事績を学べることに感謝しつつ、松本先生のように、名譽は一切いらぬ、名譽教授にはならないと固辞した白川先生のことを思いながら『漢文を讀む人のために』を読み進めています。